

パリから見えるこの世界

Un regard de Paris sur ce monde

第48回 オーギュスト・コントの人類教、あるいは「科学の形而上学化」の精神

「理論的天才の本質は、すべての現象、すべての存在をできるだけ多く結び付けることである」

——オーギュスト・コント

現代科学が採用した実証主義 (positivism) の提唱者であり、社会学の創始者でもあるオーギュスト・コント (Auguste Comte, 1798-1857) の哲学については、これまで何度か触れている。わたしが唱える「科学の形而上学化」のアイディアが浮かんだのも彼の三段階理論に負うところが大きい (244 巻 6 号、250 巻 11 号)。その理論によれば、人間精神の発展段階は神学的段階と形而上学的段階という二つの段階を克服して科学的段階に至るもので、この最終段階こそが人間精神が到達する最高の地点だとされる。これは想像だけに基づく哲学的思考の否定であった。その後、この理論はウィーン学団の論理実証主義などを経てさらに洗練され、現代科学の中に埋め込まれることになった。ある時、このように理性を徹底するところに最高の価値を見ていた彼が晩年に宗教を始めたという話を読み、驚いたのである。なぜ自ら否定した神学的段階に逆戻りしたのかという疑問が湧いたからである。しかし、さらに調べるところまでは行かず、そのまま放置されることになった。この疑問が蘇って来たのは大学院生活が終わった昨年末、長い間お休みしていたサイファイ・カフェ SHE のテーマを何にしようかと考えていた時のことである。人生の総決算に当たる時期に実証主義の後の段階として科学を神とする科学主義に向かうのではなく、なぜ新たな宗教を唱えたのか。その答えを探ることで、科学と宗教に関わる普遍的なテーマが浮かび上がるのではないかと。そんな期待を込めて、このテーマを取り上げることにした。

少し脱線するが、このやり方は「もの・こと」の内容を知ってからテーマを決めるのではなく、考えてみたいと思うテーマを先に決め、それから「こと」に当たりましょうといういつもの態度であった。これはフランス語を始めてすぐに気付いた文型によく似ている。その文型とは « A, c'est X. » というもので、「A」と言って興味を持っているテーマを前に投げ出し、その後「それは X である」と説明を加えるものである。別の言い方をすれば、ある「もの・こと」を定義することにも通じるところがある。前にバスケットのようなものがあり、気が付いた時に A、B、C とそこに投げ込ん

でおき、時が経ってから取り出して調べてみると、それは X であり、Y であり、Z であることが分かるというようなイメージである。ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer, 1788-1860) に言わせれば、「膠でつないだような卑しい言語の貧しい文法」と散々なのだが、わたしはそこにリズムと躍動感を感じ、比較的気に入っている文型になる。ということで、コントの宗教については調べが終わるまでよく理解していなかった。



人類教教会 (Chapelle de l'humanité)

中央にコントの胸像が見える

(2016年2月1日)

コントがモンペリエからパリに出てきた若き日にサン・シモン (Claude Henri de Rouvroy, comte de Saint-Simon, 1760-1825) と仕事を共にする機会に恵まれ、そこで政治、経済、社会の問題に開眼したようである。多くの科学を学ぶことにより、彼が「哲学」と称する科学の方法論の抽出を目指し、その方法論で社会の問題を解決することを模索した。1826年には実証主義の哲学を教える講座を開設し、その内容を1830年から1842年にかけて『実証哲学講義』 (*Cours de philosophie positive*, 1830-1842) として発表し、実証哲学を構築した。その歩みの中で科学のヒエラルキーの最高のもので社会学を打ち立てることになった。彼は他にも1832年から18年間、やはり市井で天文学を教える講座を開いていた。自らの研究成果を含め、学問を広く市民に知ってもらおうとする心をそこに感じる。

ここで彼の私的な生活を見てみたい。なぜ彼が宗教に向かったかのヒントがそこにあるかもしれないからである。1825年、彼は元売春婦のカロリーヌ・マッサン (Caroline Massin, 1802-1877) と結婚している。知的で献身的な女性だったと言われるが、コントの感情生活とどれだけ合致したのかは分からない。1842年には17年に及ぶ結婚生活が破綻している。その2年後、コントの教え子でマクシミリアン・マリー (Maximilien Marie, 1819-1891) という実証主義者の妹クロチルド・ド・ヴォー (Clotilde de Vaux, 1815-1846) と出会うことになる。コント46歳、ド・ヴォー29歳であった。逡巡の後に文通が始まるが、僅かその1年後、彼女は結核でこの世を去る。この間に交わした手紙は180通。コントに「常に考えることはできないが、常に愛することはできる」と言わしめたその恋愛は終りを告げたのである。それ以降、コントは人間と精神の哲学、人類の未来に関する宗教的概念の研究に向かうことになる。



クロチルド・ド・ヴォーの肖像

ルイ・ジュール・エテックス (1810-1889) 作

オーギュスト・コントの家にて

(2016年2月3日)

コントの宗教の底にはクロチルドに対する「喪の作業」としての要素があったのかもしれない。これは人生で大切な人を失った時、そのこととどのように向き合うのかという大きな問題とも関係している。フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) の喪の作業は、失った人、失った「もの・こと」に代わるものが入り込む余地ができるように死者との関係の一つひとつ放棄するものであった。一見すると、現在を肯定し、そこにしか真実がないようなやり方に見える。それに対してコントの場合は、クロチルド

の死を完全に否定し、思い出を大切に育み、ものを保存し、恰もその人が生きているように死の崇拝をするところがあり、クロチルドの死を否定するために宗教の研究に入ってしまったと見る人もいる。

コントが生きた時代はフランス革命が終り、社会は混乱していた。その中で、これから社会をどのように再構築していくのかということが大きな問題になっていた。彼は感情と理性と活動の組み合わせにより人間存在の体系化を図ることを提唱し、社会の効果的な繋がりには宗教だけだと考えるようになる。彼が唱えた「人類教」の目的は人間性だが、それは現在生きている人だけではなく、過去、そしてこれから来る未来の人類にも関わるものだった。この連続性が重要だとしたのである。彼の体系に超越的な神は存在せず、寧ろ人類を神格化したと言えるかもしれない。宗教 (religion) の語源にはラテン語の *religare* があり、それは「結び付ける」ことを意味している。コントはすべての人間的要素を結び付けて出来上がった最良のものを宗教として考えていた可能性があり、統一、調和、統合といった概念に近いニュアンスがある。超越的な存在と垂直の関係を結ぶのではなく、水平方向の精神の動きだったように見える。このような理解に達すると、彼が構想した宗教はわたしが想像したような神学的状態への回帰ではなく、寧ろ科学的な段階の先に来るべきものとして彼が求めた世界を実現するための手段だったように見える。



人類教

「原理としての愛と基礎としての秩序、目的としての進歩」

教会正面にはこの言葉が刻まれている

(2016年2月1日)

今年の2月、パリ三区のマレ地区 (Le Marais) にあるコントの人類教教会を訪れた。教会らしき建物を探していたため、最初はそうと気付かずに通り過ぎた。建物の壁は一部剥がれ、注意して歩いていないと見過ごしてしまうくらいの目立たないもので、

扉も閉じられたままであった。外壁中央には「原理としての愛と基礎としての秩序、目的としての進歩」という言葉が刻まれていた。社会の構成員相互の愛による結び付きによって社会の秩序を維持し、進歩を目指そうとする考えがそこにある。因みに、利他主義という言葉は彼の造語になる。彼の宗教は人間の内なる心の問題を優先的に扱うというよりは、社会の平穩を求める社会運動の色彩が強い。カルチエ・ラタンのいまは博物館になっているコントの家 (La Maison d'Auguste Comte) で伺ったところによると、国旗にコントの標語である「秩序と進歩」(*ordem e progresso*) が描かれているブラジルでは大きな影響があったが、現在のフランスには信者はおらず、歴史的な存在になっているという。コントの人類教の中に、宗教としての生命を支える何か欠けていたのかもしれない。

このように理解すると、コントは実証主義を提唱したが、実は根っからの実証主義者ではなく、その先に何かを見ることのできる人間ではなかったのだろうか。あるいは、実証主義から完全には抜け出ることができなかつたが故に不完全な宗教に終わったのだろうか。ウィーン学団の創立者で論理実証主義の父と言われるモーリッツ・シュリック (Friedrich Albert Moritz Schlick, 1882-1936) も論理と実証を唱えた人生の後半に『人生の意味』(*Vom Sinn des Lebens*, 1927) や『倫理の問題』(*Fragen der Ethik*, 1930) という書を著わしている。それまでのテーマとは一見かけ離れた問題について考えていたのである。これらの事実は、人間は論理と科学的思考だけで人生を充ちたものができるのか、それで満足が得られるのかという問いを投げ掛けているように見える。これは専門性と人間性の対立と調和の問題に置き換えることができるかもしれない。

さらに目を凝らすと、人類教の基礎にある考え方と科学の形而上学化に向かって行った精神との間に近いものが見えてくる。科学の形而上学化とは、科学の中での事実について考えるだけではなく、その成果に繋がるものをコントが捨て去った神学的、形而上学的要素を取り戻しながら、科学から生まれた知識と同じ平面で論じようとするものである。理性を用いて、専門や知の階層を超えた諸々の要素を「結び付ける」営みとも言える。そうすることで科学の中にいるだけでは達し得ない人間への理解や自然に対する洞察が深まることを期待してのことである。その上で、これらの営みすべてを含めた全体を新たな科学として再定義しようとするものでもある。コントが宗教の中に見ていた、人々を「結び付ける」働きと科学の形而上学化の精神は、向かう対象こそ異なっているものの精神運動の構造自体にはそれほど差がないだけでなく、根では繋がっているようにさえ見える。

これらの議論を「意識の第三層」(258巻2号)と絡めると、次のような景色が見えてくる。科学の形而上学化という営みは、実は科学についての「意識の第三層」を深めることになるのではないか。単に科学の中での事実を集めて語るのではなく、その事実を歴史と哲学の光の下に照らし出し、さらにそれを自らにも問い掛けること、すなわち省察することがそこに関わってくる。そして、これは科学に限ったことではなく、政治でも経済でも文化一般においても求められることであり、いま衰弱しているように見えるものである。それが靈感を与えるだけの真の面白さの欠如や精神世界の活力の低下に繋がっているのではないだろうか。「・・・について考え、語る」時の「深さ」とか「豊かさ」と言われるものは、実は「・・・についての意識の第三層」を如何に充実させるのか、そのことについてどれだけ多様な関係づけがされているのかに懸かっているとと言えるだろう。そして、意識の第三層から成る全的生活のエッセンスとは、実はコントの言う宗教のそれにも繋がっていることが見えてくる。このように考えを進めてくると、「意識の第三層の充実」あるいは「・・・の形而上学化」という精神運動がそれなりの普遍性を持った概念に変容してくるようである。



ソルボンヌ広場のオーギュスト・コント像

向かって左側にクロチルドをイメージした像が刻まれている

(2015年12月23日)

思い返せば、このシリーズ初回にコント像が写っているソルボンヌ広場の写真を選んでいた (240 巻 6 号)。その像の存在にはパリに住み始めて 1 年ほどしてから気付いたほどで、当時は何の意味もないものであった。しかし、その後コントの哲学が「科学の形而上学化」に絡み、そして 9 年目にして初めてコント像の横には人類教に靈感を与えたと言われるクロチルド女史の像が寄り添っていたことを知っただけではなく、人類教の根底にあった精神は実は「科学の形而上学化」の精神とも通底するものであったという発見にも繋がった。「すべては繋がっている」*« Tout est lié ! »* というわたしの感覚を益々強固なものにしてくれる出来事であった。そして、その「すべて」がこの世界に限りなく近くなった時、何かを理解したという心境になるのだろうか。そこへの歩みこそが「わたしの哲学」なのかもしれない。そんな妄想が浮かんできた、すでに秋が忍び込んでいる真夏のパリである。

(2016 年 8 月 7 日)